

# 折々の便り

ふるさと愛南町を遠く離れて生活されている方に「ふるさとへの想い」をご投稿いただき、新たな交流のきっかけになればと「折々の便り」というコーナーを設けています。  
今回は、中川在住の入江豊、英美夫妻の紹介で、ニュージーランドにお住まいの石塚裕子さんからご投稿いただきましたので紹介します。

## 愛南の海は、私たちのふるさと

右側に見えて来る海。町の名前が変わり、陸の景観が変わっても、この海だけはいつも同じ。私は中浦で生まれ育ち、当時の南内海中学校を卒業すると同時に地元を出て、バレーボールの特待生として松山の高校で寮生活を始めました。

厳しい生活の間、帰省の度に目に入る故郷の海岸線は、いつも「帰ってきた」ことを実感させてくれました。親元を離れた日々の生活が過酷だった分、故郷の海が見えると、余計にその厳しさから開放された気がして嬉しかったことが思い出されます。

高校卒業後も、地元に戻ることもなく、遠くで暮らしてきた私にとって、中浦、そして、南宇和は、常に恋しく、懐かしく思える故郷です。

私は現在、ニュージーランド(NZ)で暮らしています。選手時代、いろんな国に遠征して海外に興味を持ったのがきっかけで、短期滞在したNZで日本人の夫と結婚し、定住することになりました。

NZは、日本からちょうど九州を除いたくらいの島国で、私の住むクライストチャーチは、南島の中央に位置するこの国、第二の都市、ガーデンシティーと呼ばれる緑豊かな街です。ここで私は、3人の子供たちと暮らしています。子供たちがまだ小さい頃は、毎年のように里帰りをし、私の母校である中浦小学校に通わせてもらい、中浦っ子たちとも友達になりました。普段、英語と日本語の標準語を話す子どもたちが、みんなと遊ぶうちに中浦の方言を話し始めるのがおかしくもあり、何となく嬉しくもありました。

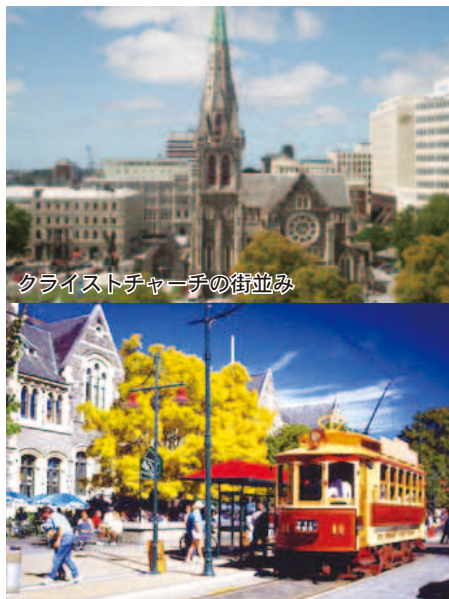
現在は、学校も以前のように長期で休ませられず、最後の帰国から5年も過ぎてしまいました。14歳になった双子の長男、次男、そして11歳の長女は、日本の子供たち同様、放課後のスポーツに明け暮れています。彼らが夢中になっているスポーツとは、国技のラグビーでも人気のサッカーでもなく、なんとボールルームダンスとラテンアメリカカンダンス。「シャルウィダンス?」の世界です。英国系の国ということ、昨今の世界的ブームということもあり、子供たちの競技人口は結構多いようです。

今年8月、首都ウエリントンで開かれた全国大会では、長男が昨年に続き優勝、次男が準優勝し、12月には隣国オーストラリアで開催される国際大会へ3兄妹そろっての出場が決まっています。日々練習に励んでいます。

そんな子供達は今でも事あるごとに、中浦の友達や一本松の親戚の事を話題にし、懐かしがり、そして里帰りしたときに真っ先に見える海が、私が感じるのと同様に「帰ってきた」ことを実感させてくれるのだといいます。NZで生まれ育ち、英語を母国語とする彼らにとっても、南宇和は「故郷」なのだと思います。(投稿文 石塚裕子さん)



写真中央の女性が石塚裕子さん



クライストチャーチの街並み